

令和元年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都府立田辺高等学校 】

1 実践テーマ	【 III・V 】
2 実施対象者	全校生徒 919名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 ()</p> <p>② 行事名 (オリンピック・パラリンピック教育講演会)</p> <p>③ その他 (LHRで実施)</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目 標 (ねらい)	<p>(1) トップアスリートの実践に触れさせ、生徒に「スポーツの力」を実感させるとともに、豊かな「スポーツのこころ」を育む。</p> <p>(2) パラ・アスリートとして自らの状況をポジティブに捉え、夢を叶えるために努力を重ねてこられた経験に触れさせることで、生徒の自己肯定感を醸成する。</p>
5 取組内容	<p><オリンピック・パラリンピック教育講演会></p> <p>(1) 日時 令和元年 11 月 27 日 (水) 午後 1 時 50 分～午後 3 時 20 分</p> <p>(2) 場所 本校体育館</p> <p>(3) 対象 全校生徒</p> <p>(4) 講師 上山 友裕 氏 (車いすアーチェリー選手)</p> <p><講師プロフィール></p> <p>2006 年 大学に入ってからアーチェリーを始めた。 2011 年両下肢機能障害が私生活に影響を及ぼすようになり、パラの試合にも出場するようになる。 2012 年からナショナルチームに入り、リオデジャネイロパラリンピック 7 位入賞。 2020 東京パラリンピックに出場が内定している。</p> <p>(5) 講演 「夢の叶え方」</p> <p><内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生時代、何も熱中することがなかった上山選手がアーチェリーを始めた経緯と、人生の転機に訪れるチャンスをチャ

ンスとして気づくことの大切さについて

- 両下肢機能障害になって実感した「できないことばかりに目を向ける」のではなく「できることをやる」、そして「障害者を見たら助けよう」ではなく、「困っている人を見たら助けよう」という考え方について
- アーチェリー競技のルールとこれまでの世界選手権等での戦績について
- 父親の死から受けた精神的な落胆を乗り越えて出場を果たしたリオデジャネイロパラリンピックについて
- 2020 東京パラリンピックに向けて心掛ける「目標→努力→結果→反省」というプロセスについて
- アーチェリー実演
- 質疑応答



6 主な成果

(1) トップアスリートの「夢の叶え方」から学ぶ

「高校生時代は、特に目標もなく毎日ゲームセンター通いをしていた。」という上山選手が、大学入学を機にアーチェリーを始め、自らの人生を大きく変えていったことに多くの生徒が共感を覚え、目標を持つことの大切さについて学ぶことができた。夢と目標の違いや、目標を達成するためのプロセスについても具体的に示され、生徒の印象に残るものであった。

	<p>(2) 生徒のスポーツに対する興味・関心を喚起する アーチェリーの実演は生徒が圧倒される迫力で、その後の競技ルール解説では、勝敗の決定方法や、その中で展開される勝負の駆け引きなどをわかりやすく説明されたため、アーチェリーというスポーツについて生徒の興味を喚起する内容であった。また、余談として、上山選手がリオ・パラに出場された際の選手村の様子や著名人との交流などの話をされ、オリンピック・パラリンピック自体への興味を深めた生徒も多く見られた。</p> <p>(3) 生徒の自己肯定感を醸成する 何よりも生徒の心に訴えかけたのは上山氏の人間性である。車椅子生活となった自らの状況をポジティブに捉えて人生を歩んでおられる姿や、父親の死という精神的な落胆を乗り越えてリオ・パラ出場を勝ち取ったエピソードが生徒の心に響き、「自分も目標を持って前向きに生きて行きたい。」という内容の感想文を記入した生徒が多く見られた。生徒の自己肯定感の醸成という、本講演会の目標に沿う内容であった。</p>
7実践において工夫した点 (事業の特色)	講演の中で車いすアーチェリーの実演を行っていただいた。迫力のある射的で、生徒の興味を惹くものであった。
8主な課題等	<p>(1) 講師の選定 トップアスリートを講師として招請する場合、限られた伝手の中で選定しなければならないことに加え、日程の調整が非常に困難である。本校では今年度、当初予定していた講師の日程が合わず、急遽変更することとなった。</p> <p>(2) 実施形態の検討 トップアスリートによる講演はたいへん有意義であるが、その場限りで話を聞いて終わるといふことのないように、系統性や双方向性を持たせる等、実施形態について検討が必要である。</p>
9来年度以降の実施予定	トップアスリートを講師として迎え、実施したい。対象とする生徒や実施形態については、上記の課題を考慮に入れ、効果的に実施できる方策を今後継続して検討する。